

## 景気は気分

東洋学園大学現代経営学部 教授 木村 壮次

“気”に関心があり、渋谷の西野道場に通って気功法を行っている。若い頃、由美かおるの熱烈なファンだったが、20年程前に、彼女が渋谷の道場で気功法の指導をしていることを知ったのがきっかけである。彼女は師匠の西野皓三氏のバレエ団に所属し、西野氏が開発した呼吸法をマスターしていたのだ。暇な時間を利用して、彼女との手合せ（対気という）を行うために西野道場に通ったのである。動機はやや不純であったが、彼女が指導に現れなくなった現在も渋谷通いを続けているのは、“気”の奥深さに嵌ってしまったからである。

友人たちから、「安くない稽古代を払って…、単に“気のせい（科学的な根拠もなくそう思えること）”ではないの？」と言われているが、確かに“気”のせいなのである。とにかく稽古場は、明るく元気がみなぎっている。どんなに疲れていたり、嫌なことがあっても道場に行ってくると気分は明るくスッキリなのだ。単純な男といわれればその通りであるが、世の中もそのように動いている。科学的根拠、理論、理屈で世の中が動いているのではない。まわりに暗い人が大勢いるとその場の雰囲気は自然に暗くなる。逆に明るい人たちに囲まれていればいつも楽しい。

景気も“気分”によって大きく左右される。マスコミに露出する経済学者やエコノミストたちが先行き不安をまき散らせば、世の中みなそんな雰囲気になってしまう。昨年までの日本経済がそうした状況であった。少子高齢化や財政赤字で日本はもう終わりだという気分が蔓延すれば、实体经济もそのように委縮したものになってしまう。金は天下の回りものと言うが、お金を回す主体は消費者であり、経営者である。景気が悪化した時、お金がスムーズに回るように頭をしばるのが政府と日本銀行である。委縮して、お金がスムーズに流れなければ経済は悪化し、明るい気分でお金がぐるぐる回っていけば景気は良くなる。

アベノミクスは昨年までの暗い気分を払拭させた。このため、昨年末から日経ダウが大きく上がり、円レートも円安を生み出した。今年の初めの

日経ダウは昨年ボトムから5月には7割以上値上がりし1万5000円台をつけ、円レートは80円台から100円台となった。どちらも年初におけるエコノミスト、経済学者、マーケットの専門家の予想をはるかに超えるハイピッチの上昇だった。

“資産効果”という言葉がある。これは、イギリスの経済学者ピグーが提唱したといわれ、家計や企業が保有する株式や土地などの資産（ストック）価格が上昇することによって、消費や投資が増える効果のことである。フローとしての所得の増加は経済活動に直接影響を及ぼすが、ストックつまり金融資産や不動産などの価格が上昇することによっても気持ちが豊かになったり、担保価値が上昇して、消費や投資が増える。1980年代半ばから90年頃にかけてのバブル期の日本で消費が盛り上がったのが典型例である。今回のアベノミクスによる株高によって、高級マンション、乗用車など高額品の売れ行きが好調だ。これも資産効果が働いているからだ。

「景気は期待から」とも言われているが、株価は特に期待という気分によって大きく変動する。株価は基本的には企業業績によって値上がりしたり、値下がりすべきものとされているが、気分的要素も影響する。ただ、近年の株式市場は人間の気分以外に、一秒間に何度も取引を繰り返して利益を稼ぐ、コンピューターによる高速の自動売買が値動きを大きく左右させている。コンピューターは機械的な動きであるから、人間ほど融通がきかず、短時間で暴落させる場合がある。しかし、コンピューターを指揮するのは人間である。一時的な調整はあっても、趨勢的には株価の値上がり期待されている。こうした期待感、株高という資産効果によって、消費を増加させ、企業業績を押し上げる。これによって、やがてはボーナスの増加や賃金引き上げなどフローとしての所得増加が実現されよう。それは消費増加をもたらせ、企業の設備投資を活発化させる。これに円安が持続していけば、輸出も増え、デフレ脱却から实体经济の好循環がもたらされよう。